

受講者アンケートから見る  
オンライン授業の効果と課題  
—2020年度前期開講，英語科教育法Ⅱの授業を通して—

田村 岳充

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第71号 別刷

2021年3月



# 受講者アンケートから見る オンライン授業の効果と課題 —2020年度前期開講，英語科教育法Ⅱの授業を通して—

Effectiveness and Problems of Online Lessons Identified  
from a Student Questionnaire  
—Through Methods of Organizing English Language Education Ⅱ  
Lessons held during the First Half of 2020—

田村 岳充<sup>†</sup>  
TAMURA Takamitsu

本研究は，新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い，学生のキャンパスへの入構制限，対面授業の中止とオンライン授業への移行を受け，本学で2020年度前期に行われたオンライン授業のうち，筆者が担当した英語科教育法Ⅱに焦点を当てたものである。①全てオンラインで行われた授業が受講者の学習状況にどのような影響を及ぼし，どのような負担を与えたか，②授業にテレビ会議システムを取り入れ，教員及び受講者が双方向でコミュニケーションを図る機会を設けることで，受講者が一体感を感じながら学ぶことができたかという2つについて探索することを目的としている。英語科教育法Ⅱは，教育実習を目前に控えた3年生が受講者の中心となる。授業を構想・実践し，省察するための素地を身に付けるためには，オンデマンドで提供される資料をもとに受講生が自学で学ぶだけでは，指導技術や指導案作成のポイント等を深く理解することは難しい。そこで，テレビ会議システムを取り入れ，教員と受講者が双方向でコミュニケーションできる態勢を取った。受講者を対象としたウェブアンケートには受講者25名中，24名が回答した。調査結果から，授業外の自学への取組は対面授業と比較して増えたとする回答が50%，そうは思わないとする回答が50%となった。また，負担感が増したとする回答が70.8%に上った。教員，他の受講者との一体感が感じられたかを問う設問には，66.7%の受講生から肯定的な回答があった。オンライン授業にテレビ会議システムを取り入れることの効果が示された一方，対面授業とオンライン授業との混合やそのバランスの取り方等を含め，今後とも検討を続けていく必要があることが分かった。

キーワード：オンライン授業，テレビ会議システム，受講者負担，受講者の一体感

## 1. はじめに

2020年初頭から猛威を振っている新型コロナウイルスの影響により，3月初旬から全国の小中学校，高等学校，特別支援学校での休校要請が行われ，その後発出された緊急事態宣言により休校の延長が長く続く事態となった。全国の大学でも前期日程の開始を遅らせるとともに，新型コロナウイルス

<sup>†</sup> 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: tamuratakamitsu@cc.utsunomiya-u.ac.jp 田村岳充)

ス感染拡大を防止するため、対面での授業を中止する対応を急遽決定する等の対応に追われた。本学もその例に漏れず、昨年度末から今年度当初にかけて前期授業の実施方法の検討を行い、全学的に対面授業を中止し、全てをオンライン授業で行うことを決定した。ICTやオンライン授業に長けた教員が中心となって編成されたチームによってオンライン授業ポータルサイトが開設されたり、教職員のメーリングリストを通じて様々な情報提供がなされたりする等、多くの教員がオンライン授業を始めようという状況に対応するための支援がなされた。また、大学院ですでに導入されていたeラーニング向けプラットフォームであるC-Learningを学部レベルにも新たに導入することとした。しかし、様々な対応が矢継ぎ早に、そして手探りで続く中で、オンライン授業を行う教員にとって、どのようにオンライン授業を構想・実施し、評価していくのか、その検討は喫緊の課題となっている。過去に同様のケースを誰も経験したことがない中で、実践と省察を繰り返しながらその答えを探究していくしか道はない。また、オンライン授業が、受講者にとっても学び甲斐のある、意味のあるものとなるように、彼らの声にも真摯に耳を傾ける必要がある。

## 2. 問題と目的

### 2. 1 研究の背景

本学ではすでに2000年代中頃から、eラーニングに対応できるプラットフォームであるMoodle (Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment) を導入した授業を展開してきた。天沼(2007)をはじめとする活用事例の多くは、対面での授業が中心としつつ、受講者が学外で補充的な学習を行うためにMoodleを利用したり、掲示板機能を活用し、分野やセミナーの連絡事項を共有したりするためのものであった。受講者の自学を支援することや、教員、受講者が重要な情報を共有することができる等の効果を発揮してきた一方で、あくまでも対面授業やセミナーを補完し、より充実させる役割を果たすためのものであり、すべてをオンライン授業として行うことを想定したものではなかった。

学外に目を移してみても、すべての授業をインターネット上で行う日本で初めての4年制大学として2007年4月に開学したサイバー大学のような教育機関は存在するものの、インターネットによる授業配信を行っている4年生大学の増加率は低くとどまり、世界的に見て後れを取っている状況にあるという(石田・雲居・後藤・後藤・平澤, 2010)。オンライン授業について草薙(2020)は、受講者のインターネット接続環境やコンピューター・タブレット等ハード面での準備状況等の環境が整えば、「テスト」「プリント等の教育資料」は比較的差し支えなく対面授業と同様に行えるほか、教員による説明も動画配信によって対応できると述べている。さらに、教員—学習者、学習者相互のコミュニケーションもビデオ会議システムを活用することによって代替可能としている。しかし、対面授業を構成するこうした部分的な機能をそれぞれメディアに移行しても還元できないものとして「生活集団・学習集団の不在」を挙げている。特に新入生の場合に顕著であるが、どれだけメディアを活用した学生相互のコミュニケーションの場を設けても、実際に空間を共にするような効果が得られないとし、将来に備え、オンライン授業の利点や果たすことができる役割とともに、担うことができないことについて検討し、議論をしていく必要があると訴えている。このように、新型コロナウイルスへの対応を契機として緊急的に実施されることとなったオンライン授業をどのように実施していくのか、また、終息が見えない状況のもとで対面授業の代替となりうるのかは、教育関係者のみならず、社会全体の関心事となっている。

本研究で取り上げる英語科教育法Ⅱは、筆者が例年前期に担当し、9月に教育実習を控える3年生を主な対象とした授業である。前年度までに英語教育や第二言語習得等について理論を中心に学んできた学生に、教育実習で必要となる指導技術や生徒理解等について実践的な指導を行っている。そのため、講義ではあるが、いわゆるアクティブラーニングや模擬授業等の演習的な要素を多分に含むものとなっている。受講者がオンデマンドで自学を進めるだけでは、教育実習で実践できるものを学び取るのは非常に難しい。そこで、テレビ会議システムを授業に取り入れ、教員と受講者が双方向でやり取りができ、対面授業に代わりうるものにできないかと構想したことが本研究の端緒となっている。

## 2. 2 研究の意義

ここまで述べてきたように、コロナ禍で学生がキャンパスで学べないという緊急事態となり、単に授業を成立させることが目的化されそうな状況もある。また、すべての授業をオンラインで受講することは学生にとっても初めての経験であり、どのような負担が生じるかをしっかりと把握する必要がある。さらに、受講者の学びの質・量を保証すること、そして教員と受講者、受講者が相互につながりを感じることができるオンライン授業とはどのようなものかを検討することも重要である。しかし、草薙(2020)が投げかけているような、オンライン授業における「生活集団・学習集団の不在」を解消する試みについてまとめた例は筆者の知る限りまだ見られない。

こうした課題の解消に向けたシラバスづくりやメディアの活用についての探索的な取組とともに、受講者の反応を調査する本研究が、今後も展開されていくオンライン授業の在り方について考える契機となり、受講者が一体感を感じながら学ぶことができる授業づくりに結びつくことが期待される。

## 2. 3 先行研究

小塚(2018)は、愛知教育大学における学生の英語学習環境の改善を図るために2011年に導入したeラーニングの現状と展望についてまとめている。小塚(2018)によると、愛知教育大学では、外部企業が開発したeラーニングによる英語トレーニングコースを導入し、教養科目としての英語授業がある1年生、2年生全員に加え、3年生以上の希望者にもアカウントを発行している。調査を行った2017年度はすべての授業を対面で行い、英語力向上のため、受講者にトレーニングコースを活用するように促した。調査対象となったのは8クラスで、授業後に行う課題として英語トレーニングコースを活用する3クラスと、課題としては指定しないが、自主学习として任意で活用することができるような環境を整えた5クラスがあった。調査の結果、2017年度後期には、課題としてコースの利用を課したクラスでは受講した学生の100パーセントがeラーニングを利用したが、自主学习として利用を促したクラスでは、利用率が20パーセントにとどまり、自主学习として学習機会を提供されても実際には利用しないという受講者の実態が明らかとなった。コース利用の効果や今後もコースを活用した学習を継続したいかを受講者に問う設問への回答からは、8割程度の受講者がeラーニングでの英語学習に効果を感じ、楽しいと回答している一方で、回線が混雑するとシステムエラーが出る、音声録音する方法が分かりにくく操作がしにくい等、4割弱の受講者が使いにくいと感じていることが分かった。受講者に活用されればeラーニングは一定の効果を発揮することが示唆されるとともに、コースの利用方法について、受講者への適切かつ十分なガイダンスを行う必要性が確認された。

野澤・清水(2012)は、立命館大学の経済学部で2005年度後期から1年生の英語プログラムに導入したeラーニングプログラムに対する受講者の英語力の伸びを事前・事後で測定するとともに、プロ

グラムへの興味・楽しさや満足度等、情意面での変容をオンラインでのアンケート調査によって調べた。使われたプログラムは外部企業が開発したTOEIC対策のためのもので、基礎・初級・中級・上級の4レベルがあり、各レベル内にリーディング及び語彙、リスニング、ライティング、スピーキングの4領域に加えて文法を学ぶ学習プログラムが準備されている。授業はCALL教室のLL機能を活用し、基本的な英語発音の訓練やビデオ教材等をもとに受講者が学ぶものとなっている。週1回の対面授業90分のうち、20～30分程度、また、授業外での自学にeラーニングを加えたブレンド学習(Blended Learning)の形式で行われている。ここでは行われた2つの調査のうち、受講者の情意面での変容を尋ねたアンケートの集計結果についてのみ触れる。

調査は、2010年度の経済学部1年生で、27クラス中、協力が得られる10クラス235名を対象として、受講開始時(4月上旬)、受講中(6月中)、受講終了時(7月下旬)の3回行われた。受講者が授業でプログラムにアクセスをした際、オンライン上で回答する形で、プログラムへの興味・楽しさ、受講者のやる気、学びの役立ちの実感、学習の進捗状況等情意面について尋ねた。プログラムへの満足度は、中間では肯定的な結果が出ているものの、事後に向けて下降し、満足度が下がる結果となった。その理由として、プログラムを利用した学習の成果が、受講期間中に実施されたTOEICの結果に結びつかなかったこと等が理由だと考察しており、学んだことが何につながっているのかを実感できるかどうか、受講者の情意面に影響を及ぼしていることが分かった。

杉本・櫻井・岩崎・郭(2017)は、東京未来大学モチベーション行動科学部の経営・心理・教育系学生のうち、2016年度春学期に情報処理基礎Iを受講した学生対象に、オンライン授業に対する意識調査を行い、オンライン授業の効果及び今後の可能性と改善すべき課題について考察した。

授業は、今後の大学生活及び社会人としての生活に不可欠なコンピューターやネットワークの基礎的な知識と技能(情報検索の方法、電子メールの送受信、文書作成・表計算・プレゼンテーションソフトの利用等)を身に付けることを目的として展開された。初回のみ対面によるガイダンスと情報システムの利用方法について行い、2回目以降はオンライン授業によって実施された。オンライン授業の持ち方については、まず60分の動画視聴を行い、その後学習内容についてオンラインでの小テストを実施し、電子掲示板を利用した質疑応答の機会が設けられた。

アンケートは、最終の授業が終了した後、全課題の提出を終えた受講生を対象に行われた。65名の受講者のうち全課題を提出した受講者は42名であり、そのうち36名がアンケートに回答した。アンケートの質問項目は40あり、オンライン授業で提供された動画の理解度に関するものが17問、オンライン授業に関しての満足度等に関するものが7問、オンライン授業を通しての教員と受講者、受講者相互のつながりが感じられるか等、遠隔コミュニケーションに関するものが16問で構成された。

回答から、情報検索の方法について理解度が高まったと回答する者が非常に多かった一方で、自分自身の予定通りに学習が進んだと回答する者が少ない結果となった。また、オンデマンドで動画を視聴すれば情報検索の方法や各種ソフトの利用方法については理解できるため、いわゆるhow toを身に付けるような学習内容については効果を発揮することも分かった。課題としては、受講者が自分自身の学習状況を把握し、理解度がどの程度か、また、自分がシラバス全体の何パーセントまで学んだのか等、メタ的な見方を必要とすることについては、自己の学習状況を捉える仕組みづくりや工夫が求められるとしている。遠隔コミュニケーションに関する設問への回答として、「相手(教員)の表情や身振り手振りから感情が読み取れる」「やり取りがスムーズで相手が身近に感じられる」「相手の意見が読み取れる」等、教員の存在が身近に感じられるかどうかについての項目や、「他のユーザーの

思考が読み取れる」「他のユーザーの感情が読み取れる」「ユーザー自身が参加した実感が得られる」「ユーザー自身の思考や感情・意見や評価に対する他のユーザーの反応が読み取れる」等が寄せられ、他の受講者と自分との関係性に関する項目について受講者が高い関心を示していることが分かった。調査結果から、オンデマンドのオンライン授業ではあっても受講者が教員や他の受講者との一体感を得たいと願っていることが示唆された。

道越・奥井・丸野(2020)は、京都女子大学現代社会学部でのプログラミング教育で活用しているオンライン学習システムについて、利用者へのアンケートと学習履歴データからオンライン学習システムの効果と高い学習意欲を持つ受講者がどのような特性を持つかを調査した。プログラミングは、座学による知識のみでは習得できず、受講者が実際にプログラムを書く実践的練習を積み重ねていく必要があり、限られた授業時間内に、知識に加えて演習まで完結した教育を行うことは困難であることから、授業時間外の任意の時間・場所で実際にプログラムを書く演習が行えるオンライン学習システムを導入している。このシステムでは、学習者の情報がサーバー上に集約されるため、受講者がリアルタイムでどのような問題に取り組んでいるかが表示されるタイムライン機能があり、他の受講者の動向が把握できる他、学習の成果がランキングとなり表示される機能もある。メッセージの交換等、SNSのような直接的な相互交流ができるわけではないが、表示される他の受講生の情報を各学生が見ることで、間接的ではあるが相互作用を及ぼし合う可能性がある。

分析の対象となる授業は2019年度に行われたプログラミング教育に関する3つの授業、1年生を対象とする基礎演習Ⅰ、2年生を対象とする応用プログラミングⅠ、3年生を対象とする演習Ⅲである。3つの授業とも、対面での授業を行うとともに、学習内容を補完・発展させる目的で受講者が自学としてオンライン学習システムを利用する態勢を整えた。アンケート調査はオンラインシステムの導入直後と、最終授業で行われ、ウェブ上のフォームに対して入力する形で行われた。オンライン学習システムに関する印象として、1、2、3年生の6割近くが回答したものは、「面白い」「便利だ」「達成感がある」「今後の学習や卒業後に役立つ」であった。また、オンライン学習システムがあることで授業内容の理解が深まったかという問いに対して、「とても理解が深まった」「やや理解が深まった」という肯定的な回答をした受講者は全体の84.6パーセントに上った。

また、タイムライン機能によって他の受講者の学習状況について意識をした受講者はランキングの上位層に多く、こうした受講者は累積学習量も多く、積極的に学習を行っていることも分かった。また、間接的とはいえ、タイムライン機能によって他の受講者の学習状況が把握できるため、そこで行われる学習者間の相互作用が受講者の動機付けにつながっている可能性が示唆された。

オンライン授業に関する先行研究には、ここで取り上げた小塚(2018)、野澤・清水(2012)のように対面授業を行い、授業での学習内容を補充したり、発展させたりするためにeラーニングを行っているといった状況で行われているものが多い。現在のように、コロナ禍に学生がキャンパスに来ることができず、授業のすべてをメディアで行うような状況はこれまでに例がなく、事前に想定することは難しい。そのためすべてをオンライン授業で行い、その効果や課題について追究する事例が少ないことは想像に難くない。

杉本・櫻井・岩崎・郭(2017)や道越・奥井・丸野(2020)は、授業を行う教員と受講者、そして受講者が一体感を感じられるか、相互作用を及ぼし合う機会があるかどうかオンライン授業の効果を高め、受講者の学びを促進するための1要素となることを示唆しており、このことは、2.1で触れた草薙(2020)の指摘ともつながるものと言える。

しかし、杉本・櫻井・岩崎・郭(2017)や道越・奥井・丸野(2020)のように、対象者間の一体感や相互作用について調査した先行研究自体は非常に限られている。また、テレビ会議システムの活用とその効果について扱った研究は、小中学校において遠隔地にいる交流相手と連携して授業を進めたものや、大学間連携へのシステムの活用について考察したもの等は見られるものの、大学の授業において教員・受講者、受講者同士が双方向でのやり取りを可能にし、その効果について調べた先行研究はほとんど見られない。こうした先行研究の限界を踏まえ、教員・受講者が一体感を持てるような、また相互作用を及ぼし合うようなオンライン授業を構想・実践するとともに、その際の受講者の意識について調査することは今後も展開されていくオンライン授業の在り方を検討する上で、貴重なデータとなる可能性がある。

### 3. 研究課題

2で示した先行研究の課題を踏まえ、本研究のリサーチクエスチョンを、以下のように設定する。

- (1) 対面授業から離れ、初めて本格的に行われるオンライン授業のもと、受講者の学習状況や負担はどのようなものとなるのか。
- (2) 授業にテレビ会議システムを取り入れ、教員及び受講者が双方向でコミュニケーションを図る機会を設けることで、受講者は一体感を感じながら学ぶことができるか。

## 4. オンライン授業への対応

### 4. 1 全学的な対応

発出された緊急事態宣言を受けて前期の授業開始が4月22日からとなったことを受け、授業開始までの期間に、自宅やアパートなど学生がオンライン授業を受講する場所でのWi-Fiの接続状況に関するアンケート調査が全学的に行われた。入学間もない1年生を中心にコンピューターの貸与を行ったり、緊急支援金を交付したりする等の支援態勢も取った。Wi-Fi環境が整っていない状況でスマートフォン等を活用せざるを得ない学生も散見されたことから、教員には学生の受信料への配慮を行うことが求められ、オンライン授業が起動に乗るまではオンデマンド、かつ、映像の使用を控えるなどの通達が出された。

### 4. 2 シラバスの改訂

オンライン授業を実施するにあたり、全学的な方針を念頭に置きつつ、受講者の学習状況や負担を考慮しながら、9月からの教育実習を控える受講生の学びを保証することができるよう英語科教育法Ⅱのシラバスについて再検討を行った。昨年度までのシラバス内で扱ってきた学習項目・内容の多くが教育実習に直結する、学ぶべき価値のあるものであるため、全15回の授業内容を基本的に継承しつつ、どの回にテレビ会議システムを入れれば学習が促進されるか、受講者の学びを保証する観点を第一に表1のようにシラバスを改訂した。なお、英語科教育法Ⅱの受講者のみを対象とし、Wi-Fi環境の有無やテレビ会議システムが使用できるかどうかを尋ねる独自のアンケート調査を第2回から第3回にかけて本学が採用しているオンライン授業システムであるC-Learning上で実施し、全員が対応可能であることを確認してからテレビ会議システムの運用を開始した。テレビ会議システムはzoomを、授業映像をオンデマンドで視聴させる際には、Microsoft社のコラボレーションプラットフォームであるTeamsを活用することとした。zoomを活用する回では、対面での授業と同様に教員、

受講者が違いの表情が見えるような環境を整え、双方向でのやり取りを行いながら授業を進めた。また、zoomのブレイクアウトルーム機能を活用すると、受講者は2名以上のグループに振り分けられ、それぞれが独自の空間でディスカッションができる。アクティブラーニングを推進するために、こうした機会を可能な限り多く取り入れるようにした。

表1 前年度までのシラバスと今年度のシラバス対照表

回	前年度までのシラバス	今年度のシラバス	今年度の授業形態 (AL:小グループによるディスカッション)
1	授業の目標と概要、評価方法の紹介、「英語科教育法[a・b]と本科目の学習について	授業の目標と概要、評価方法の紹介、「英語科教育法[a・b]と本科目の学習について	オンデマンド・ガイダンス音声
2	到達目標、CAN-DOリスト、年間、単元、授業の指導計画・評価計画	到達目標、CAN-DOリスト、年間、単元、授業の指導計画・評価計画	オンデマンド・ガイダンス音声
3	授業のデザイン、指導計画立案、指導案の書き方	授業のデザイン、指導計画立案、指導案の書き方	オンデマンド・ガイダンス音声
4	教材研究① Small TalkとInteraction	教材研究① Small TalkとInteraction	テレビ会議システム・AL
5	教材研究② コミュニケーション活動	教材研究② コミュニケーション活動	テレビ会議システム・AL
6	教材研究③ 教科書の内容理解を中心とした授業に向けて	教材研究③ 教科書の内容理解を中心とした授業に向けて	テレビ会議システム・AL
7	教材研究④ 学習形態の工夫、ALTとのティームティーチング、ICTの活用、教員の英語と日本語の使用	教材研究④ 学習形態の工夫、ALTとのティームティーチング、ICTの活用、教員の英語と日本語の使用	テレビ会議システム・AL
8	教材研究⑤ 発音指導、音読指導、ノート指導、板書、ワークシート	教材研究⑤ 発音指導、音読指導、ノート指導、板書、ワークシート	テレビ会議システム・AL
9	教材研究⑥ 即興性・流暢さの育成、パフォーマンステストとルーブリック評価	教材研究⑥ 即興性・流暢さの育成、パフォーマンステストとルーブリック評価	テレビ会議システム・AL
10	実地指導講師による指導 現場の実態を踏まえた講話及び演習	教材研究⑦ ここまでの学習を踏まえた授業映像の視聴	オンデマンド・授業映像視聴
11	教材研究⑦ 自立的・自律的な学習者を育てる指導 宿題(課題)・辞書指導・多読・多聴指導	指導案作成の具体① ねらい、題材観、指導方針、単元の指導計画との関連等を中心として	テレビ会議システム・AL
12	教材研究⑧ 帯活動、小・中・高の円滑な接続を考えた言語活動	実地指導講師による指導 現場の実態を踏まえた講話及び演習	テレビ会議システム
13	指導案作成の具体① ねらい、題材観、指導方針、単元の指導計画との関連等を中心として	自学による指導案作成	自学
14	指導案作成の具体② 授業展開と評価を中心として	指導案作成の具体② 授業展開と評価を中心として	テレビ会議システム・AL(小グループごとの指導案検討会)
15	まとめと振り返り	まとめと振り返り	オンデマンド・ガイダンス音声

## 5. 研究方法

### 5.1 調査参加者

本研究の調査参加者は、本学部で2020年度前期に開講された英語科教育法Ⅱの受講者25名のうち、調査に回答した24名である。参加者24名の所属分野(学科)を見ると、教育学部17名(英語分野10名、英語分野以外7名)、国際学部6名、前期中地留学生の現職派遣教員1名である。また、学年を見ると3年生15名、4年生8名、現職派遣教員1名となっている。

### 5.2 調査の回答期間

調査の回答期間として2020年7月3日から17日までの2週間を確保した。zoomを利用して行った7月2日の第11回目の授業の終了時にアンケートの趣旨や内容について口頭で説明を行った。また、回答内容が成績に全く影響を及ぼさないこと、回答者の特定ができないように配慮をしながら、回答の内容を本紀要への投稿論文に活用することについても伝達した。C-Learning上でのアンケートの冒頭にも同様の説明を記載するとともに、回答をすることによってこうした内容について承諾することとなる旨を記載した。結果として25名の受講者のうち期間内に24名からの回答が得られた。

### 5.3 手続き

調査は、オンライン授業のために導入されたC-Learningのアンケート機能を活用したウェブによるアンケートの形態を採った。C-Learningには開講される授業ごとに受講者自身による受講登録と

教員による承認が行われ、受講者以外の部外者がC-Learningに入り込むことができないようになっている。

調査項目については、eラーニングについて受講者の受講環境について尋ねる項目を整備した駒井(2017)、受講者の意識について多くの設問を設定した石田・雲居・後藤・後藤・平澤(2010)、また、オンライン授業での学びが受講者にとって役立つものだったかを問う設問を設けている野澤・清水(2012)を参考にしつつ、独自の設問を加えて作成した(調査に使用した項目については、資料として掲載している)。調査には4つのセクションがあり、計22の設問が設定されている。4つのセクションはそれぞれ、①参加者の所属や受講環境等について(設問1から3)、②オンライン授業でよかった、またはよくなかったと思うもの・ことについて(設問4から7)、③オンライン授業について参加者がどう感じているか(程度)について(設問8から18)、④オンライン授業についてどう感じているか(今後に向けて等の自由記述、設問19～22)のように構成されている。

## 6. 結果と考察

### 6. 1 オンライン授業でよかったと思うもの・こと

8つの選択肢のうち、複数回答でよかったもの・ことを選ぶように指示をした。受講者の半数以上が肯定的に捉えたものが5項目あった。zoomの機能である「ブレイクアウトルーム」を活用し、小グループでディスカッションを行ったこと(70.8%)、Teamsにアップされた授業映像(62.5%)、zoomを活用し、直接教員の話が聞けること(54.2%)、zoomの「ブレイクアウトルーム」を活用し、ペアでのsmall talkができること(54.2%)、C-Learningの「教材倉庫」にアップされたレジュメ(50%)であった。選択した理由について24名すべての参加者から回答があった。最も多く寄せられたのは、zoomの「ブレイクアウトルーム」を活用し、小グループでディスカッションを行うことで12件あった。主なコメントには、「zoomで他人と切り離してディスカッションできるので話に集中できる。コロナ禍で人と会えない中、zoom授業は素直に楽しい」「授業を聞くだけではなく、自分で自由に発言したり、意見を共有化することで学びが深まったりしたから」「対面の授業ではグループ活動が形骸化してしまうことが時折ありましたが、ブレイクアウトルームでグループだけの空間になり話す必然性が高まるのか、毎度充実したグループ活動ができて楽しかったです」等があった。

次に多く触れられたのは、Teamsにアップされた授業映像についてで、8件あった。寄せられたコメントには、「通常の授業に比べて授業の動画や資料をじっくりと見ることができたから」「本来なら授業中しか視聴できないような映像を自宅で何度も視聴することができるから」「対面の授業だとみることができる範囲や時間が限られているけれど、ネットに上がっているの、いつでも好きなときや必要なときに視聴することができるから」「授業の映像を一時停止や巻き戻しをしながら繰り返し見ることができたため」等があった。

### 6. 2 オンライン授業でよくなかったと思うもの・こと

6. 1と同様に、8つの選択肢から複数回答が可能としてオンライン授業でよくなかったもの・ことについて尋ねた。否定的な回答として最も多かったのは、Teamsにアップされた授業映像(33.3%)であった。以下、25%以上が否定的な回答をしたものは、C-Learningの「協働板」の情報(29.2%)、C-Learningを活用したレポート(25.0%)の2項目であった。

この設問についても24名すべてから回答があった。Teamsにアップされた授業映像について、「画

質が粗いのはネットワークの負荷の問題で仕方がないと思うが、めあてやワークシート等は鮮明なデータであるとありがたい」「映像を繰り返し見られる点はとても良かったのですが、ツールはTeamsである必要があるのかなと思います。」「Teamsが使いづらかったから」「Teamsの映像に関しては、動画が途中で止まってしまう、本来なら5分で見られるものに20分以上かかってしまう等、不便なことが多々ありました」等の意見が寄せられた。C-Learningに関するものとしては、「少し、レポート機能が使いにくく感じた。もし可能であれば、wordで作ったものを添付する形の方が使いやすいと思う」「機械的に字数が制限されるため、書きたいことを書き切れないことがしばしばあったため」等があった。

### 6.3 オンライン授業についての受講者の受け止め

5.3で示したように、本調査の3つ目のセクションは、11の設問からなり、参加者がオンライン授業についてどう感じているか、その程度について回答を求めている。ここでは、3で示したりサーチェックエスチョンとの関連が強い4つの設問への回答状況を以下に示す(図1から図4)。

オンライン授業となって、授業以外の積極的な自学自習時間が増えている。

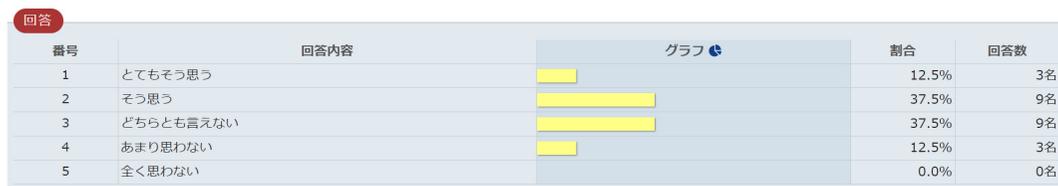


図1 オンライン授業のもとでの自学自習時間

図1から、オンライン授業となって、授業以外の自学自習時間が増えたと回答した参加者は、50%と半数に上った。どちらとも言えないとの回答が37.5%、あまり思わないが12.5%となっており、受講する学生個人によって自学自習への取組は異なり、オンライン授業の実施や、課題の質・量による直接的な影響によるものかどうかはさらに検討をしていく必要がある。

オンライン授業となって、受講者の負担が増えている。

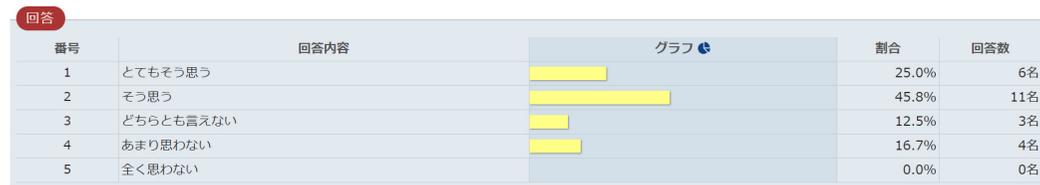


図2 オンライン授業における受講者負担

図2は、オンライン授業によって、受講者の負担が増えていると回答した参加者が、70.8%であることを示している。特に、オンデマンドで行われた授業回では、受講者がそれぞれ自学で取り組む課題が与えられ、それを提出することで出席、授業への参加を認定するものとしていた。また、毎回の授業で学んだことを、C-Learning上のミニレポートとして課したことも影響したのではないかと考

えられる。また、小さな積み重ねではあるが、毎回の授業の開始前にC-Learningにアクセスしてガイダンスを読み、準備すべきものを確認して整えなければならないこと等、対面授業の際にはその必要がなかったことが求められるようになったことの影響もあるのではないだろうか。

オンライン授業での教員の受講者への相談・支援態勢は、適切だと感じられる。

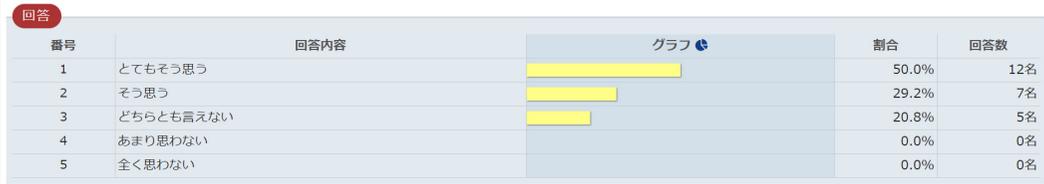


図3 オンライン授業における受講者への相談・支援態勢

図3は、オンライン授業での教員による受講者への相談・支援態勢について参加者がどのように感じているかを示している。肯定的な回答は全体の79.2%であった。また、どちらとも言えないが20.8%で、否定的な回答はなかった。C-Learningには、受講者からの連絡・相談を個人的に受け付ける機能があり、各自必要に応じて連絡・相談をしてきていた。その際、速やかに回答を送付するように努めたことも、肯定的な回答が多くなった一要因と言えるのではないかと考えられる。また、提出されたミニレポートへのフィードバックも丁寧かつ速やかに行ったことも効果を上げたのではないかと考えられる。

オンライン授業でも、他の受講者や教員との一体感を感じられたり、参加しているという感覚が持てたりしている。

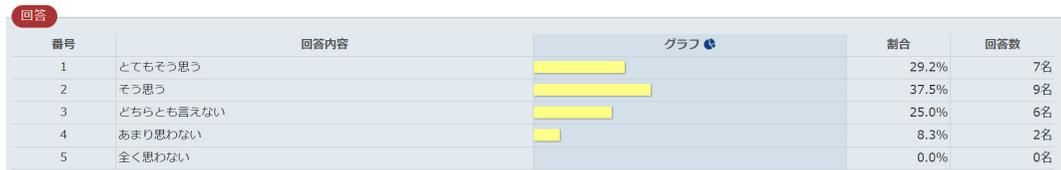


図4 オンライン授業における一体感

図4によると、オンライン授業でも、他の受講生や教員との一体感を感じられたり、参加しているという感覚が持てたりしていると肯定的に回答した参加者は、全体の66.7%であった。どちらとも言えないが25.0%あるが、否定的な回答は8.3%にとどまっている。単にレジュメを配布して各自読見ながら自学を進めることを極力廃して、zoomを活用して教員が受講者に語りかけながら授業を進めたり、ブレイクアウトルームで受講者が語り合い、学び合う機会を設けたりしたことが奏功したと言えるだろう。このことは、2.1で触れた草薙(2020)の懸念を解消するための一助と言えるかもしれない。ただし、今回の受講者は、国際学部の受講者6名、内地留学生の現職教員1名を除いて、昨年度まで対面での授業を受講してきた経験のある3年生、4年生であり、受講者相互の関係性がまだ十分に育っていない1年生にそのまま当てはまるかは分からない。今後、オンライン授業が広く普及していくのであれば、入学間もない1年生の不安を解消し、受講者が相互につながり、一体感を感じながら学ぶことができるような工夫をどのように行っていくのか、さらなる検討が必要だろう。

## 6. 4 オンライン授業と対面授業のバランスについての受講者の希望

今後のオンライン授業と対面授業とのバランスや在り方についてどう思いますか。

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	すべてオンラインでの授業を希望する		16.7%	4名
2	オンラインでの授業を多くし、対面での授業を一部という混合を希望する		25.0%	6名
3	対面の授業を多くし、オンラインでの授業を一部という混合を希望する		45.8%	11名
4	すべて対面での授業を希望する		12.5%	3名

図5 オンライン授業と対面授業とのバランスや在り方についての受講者の希望

この設問では、参加者による、今後のオンライン授業と対面授業とのバランスや在り方についてどのような希望があるかを尋ねている（図5）。すべてオンラインでの授業を希望している参加者は16.7%にとどまっている。また、オンラインでの授業を多くし、対面での授業を一部という混合を希望する参加者は25.0%となっており、オンラインでの授業の割合を高くしてほしいと希望する参加者は41.7%で、半数を下回った。一方、対面での授業を多くし、オンラインでの授業を一部という混合を希望する参加者は最も多く、45.8%となった。すべて対面での授業を希望する参加者は3名のみとなり、新型コロナウイルス蔓延前の、元の授業形態へ完全に戻してほしいと考えている参加者がわずかしかないことが分かった。

## 6. 5 受講者の自由記述

まず、受講してよかったと感じていることについて問うた。記述された回答には、「オンラインの授業であるため、座席の位置による影響を受けず、先生の話や説明を聞き逃すことがほぼなくなったことがとても良かった点である」「自分のペースでしっかり学べる（資料や映像をいつでも何度でも見返せる）」「自分が書いたレポートや視覚教材を好きな時に何度でも見返せる点」「受講者同士の顔が見られるオンライン授業が多かったため、『授業を受けている感じ』があってよかった。資料の掲載にとどまらず、先生自身からお話を聞いたので理解しやすかった」等が寄せられた。オンライン授業の強みが活かされると、受講者にとって多くのメリットがあることが現れた結果だと言える。

一方で、改善してほしいと感じていることについては、「授業映像を見て、すぐにディスカッションができないので、自分が思ったことをすぐ共有できないという点がもどかしく感じた」「レポートで評価が決まってしまうのか不安がある」「気になることがあっても授業を止めることはできないし、全員が見ているから質問しづらい雰囲気がある」等が挙げられた。教員と受講者が実際に顔を合わせる機会がなく、受講者は教員から自分がどのように見られているのか、評価が適切に行われるのか等、不安になることは想像に難くない。丁寧なガイダンスとフィードバック等、個別の支援を適切に行っていくことが今後、強く望まれる。

## 7. 総合考察

全ての授業をオンラインで行うことは、教員にとっても受講者にとっても初めてのことである。新年度の授業準備を進める時期となる年度末から新年度当初にかけての時期にオンラインでの授業実施の対応が決定され、導入されることとなったプラットフォームの運用・操作方法を習得することから始まり、教員がそれに習熟するいとまもないまま受講者へのガイダンスを行わなければならない苦し

い状況があった。zoomやTeams等の操作を行うことは、受講者にとっても初めてのこととなる。普段であれば、キャンパスで対面のもと、協働的に理解を進めることもできるが、今回は受講者が自宅やアパート等でそれぞれに個別に学ばなければならない、気軽に相談をし合うことができない彼らの混乱は想像に難くない。図3が示すように、負担が増えたと感じている受講者が70.8%となったこともこうした状況が強く影響していると考えられる。自由記述には、授業映像を繰り返し視聴できることのメリットを享受しつつ、映像が止まってしまうストレスがあるといった意見も散見された。受講者が授業を受ける場所のWi-Fi環境の影響も受けるため、受講者への支援を一層進める必要がある。

受講者の話を聞くと、受講している他の授業のほとんどがオンデマンドの授業であり、レジュメを読んで授業後にレポートを書く、という形式で行われていると言う。授業負担については、今回対象とした英語科教育法Ⅱだけをもとにしたものではなく、他の授業での負担と相まっての可能性がある。今年度どのような授業が行われていたのか、どのような課題が課されていたのか等について学部や全学での調査を行うとともに、授業や課題の在り方についても検討を行う必要があろう。

図4が示すように、zoomを活用した授業については、受講者の3分の2(66.7%)が、他の受講者や教員との一体感を感じられると回答している。7割弱の割合を高いと取るか、不十分であると取るかは判断が難しいところであるが、一定程度の成果があったと言えるだろう。自由記述にも「受講者同士の顔が見られるオンライン授業が多くなかったため、『授業を受けている感じ』があってよかった。資料の掲載にとどまらず、先生自身からお話を聞けたので理解しやすかった」「他の人と話し合うブレイクアウトセッションを活発に利用しているイメージなのでその点は良かったと思う」という好意的な意見が寄せられた。一方、「授業映像を見て、すぐにディスカッションができないので、自分が思ったことをすぐ共有できないという点がもどかしく感じた」という意見もあり、オンライン授業をさらに効果的に進めていくための課題として受け止めたい。

授業や授業外の自学の取組状況と負担感、授業への満足度と負担感等、回答相互の関連については今回分析を加えることができなかった。また、他の授業との関連についても検討ができていない。こうした研究の限界を認識しつつ、今後もオンライン授業の可能性について探究を続けていく必要がある。新型コロナウイルスの猛威が治っても、コロナ禍以前の社会や大学の在り方、授業の在り方に完全に戻ることはないと言っても過言ではないであろう。対面での授業が再開されるときに、オンラインで授業とのバランスをどのようにすべきか、受講者の学びを促進する、深化する、ということを中心に今から検討をしていくことが強く求められる。

## 参考文献

- [1] 天沼実。「外国語授業におけるe-ラーニング(Moodle)利用の試み」, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, (30), pp.11-16 (2007)
- [2] 石田崇, 雲居玄道, 後藤正幸, 後藤幸功, 平澤茂一。「学生アンケートに基づくe-learning授業評価モデルの検討」, 経営情報学会全国研究発表大会要項集, 2010f(0), pp.77 (2010)
- [3] 草薙邦広。「オンライン授業に足りない『なにか』」, 『英語教育』, 大修館書店, 66(10), pp.18-19 (2020)
- [4] 小塚良孝。「愛知教育大学におけるe-ラーニングを活用した英語学習 - 現状と展望 -」, 教養と教育(Liberal Arts and Education), (18), pp.10-18 (2018)
- [5] 駒井裕子。「e-learningによる主体的学習の支援環境の構築とその有用性の検討:対象学生による

アンケート調査結果の分析から」, 常葉大学健康科学部研究報告集, 4(1), pp.85-93(2017)

- [6] 杉本雅彦, 櫻井広幸, 岩崎智史, 郭潔蓉. 「東京未来大学におけるメディア授業の効果と課題 – 経営・心理・教育系学生に対する意識調査の分析 –」, 東京未来大学研究紀要, 10(0), pp.71-77 (2017)
- [7] 野澤健, 清水裕子. 「学習者アンケートからみるeラーニングの学習態度と効果」, 立命館経済学, 60(6), pp.818-828(2012)
- [8] 道越秀吾, 奥井亜紗子, 丸野由希. 「オンライン学習システムにおける学習者間相互作用」, 現代社会研究, 22, pp.5-27(2020)

令和2年10月1日受理

## 資料

## オンライン授業についての意識調査

このアンケートは、新型コロナウイルスの影響を受け、令和2年度に宇都宮大学で初めて実施されたオンライン授業について、特に「英語科教育法Ⅱ」を受講した学生を対象に匿名で行われるものです。オンライン授業のメリット・デメリットや、受講生の学修状況や充実度等について回答してください。回答結果は次年度以降のオンラインを活用した授業の改善に生かされます。また、集計内容は、大学の研究紀要論文にまとめるために活用されます。回答者個人の情報や回答内容は守られるとともに、成績評価とは全く関係なく処理されます。安心して回答してください。なお、回答をすることによって、この調査への協力に同意する、ということとなります。回答・協力ができないという場合は、回答をしないという選択もできます。みなさんの理解と協力をいただけたら幸いです。

まず、あなたの所属や受講の環境について質問します。

設問.1 あなたの所属学部・学科(分野)を教えてください。

- 1 教育学部英語分野    2 教育学部英語分野以外    3 国際学部国際学科    4 その他(内地留学生等)

設問.2 あなたの学年を教えてください。

- 1 3年    2 4年    3 その他(内地留学生等)

設問.3 オンライン授業で使用している端末機器は何ですか。

- 1 デスクトップコンピューター    2 ノートブックコンピューター    3 タブレット端末    4 スマートフォン    5 その他

次に、オンライン授業でよかったと思うもの・こと、反対によくなかったと思うもの・ことについて質問します。

設問.4 オンライン授業でよかったと思うもの・ことについて教えてください。当てはまるものを選択してください(複数回答可)。

- 1 C-Learningの「教材倉庫」にアップされたレジュメ    2 C-Learningの「協働板」の情報  
3 C-Learningを活用したレポート    4 C-Learningの「連絡・相談」を活用した教員への相談  
5 Teamsにアップされた授業映像    6 zoomを活用し、直接教員の話が聞けること  
7 zoomのブレイクアウトルームを活用し、小グループでディスカッションを行うこと  
8 zoomのブレイクアウトルームを活用し、ペアで英語でのsmall talkができること

設問.5 設問4について、なぜそう思いましたか。理由を教えてください。

設問.6 オンライン授業でよくなかったと思うもの・ことについて教えてください。当てはまるものを選択してください(複数回答可)。

(※設問4と同様の選択肢を提示)

設問.7 設問6について、なぜそう思いましたか。理由を教えてください。

ここからは、それぞれの質問項目についてあなたがどう感じているか、「程度」を質問します。

設問.8 英語科教育法Ⅱの授業シラバスは、オンライン授業であっても、対面授業に近い形で整備されている。

- 1 とてもそう思う    2 そう思う    3 どちらとも言えない    4 あまり思わない    5 全く思わない

(※設問9から18まで、同様の選択肢を提示)

設問.9 オンライン授業となって、授業以外の積極的な自学自習時間が増えている。

設問.10 オンライン授業となって、受講者の負担が増えている。

設問.11 C-Learningの「教材倉庫」にアップされる資料(レジュメ・指導案・ワークシート・テスト等)は分かりやすく、活用できるものである。

設問.12 オンライン授業での教員の話は分かりやすく、教育実習や現場に出てから活用できるものだと感じる。

設問.13 オンライン授業での教員の受講者への話しかけ方や対応は温かく、信頼できるものだと感じられる。

設問.14 オンライン授業での教員の受講者への相談・支援態勢は、適切だと感じられる。

設問.15 オンライン授業を受講して、授業内容の理解度は高まっている。

設問.16 オンライン授業を受講して、授業づくりの具体が理解できるようになっている。

設問.17 オンライン授業を受講して、教育実習への不安(実習を終えた受講生は、現場に出る不安)が和らいでいっている。

設問.18 オンライン授業でも、他の受講生や教員との一体感を感じられたり、参加しているという感覚が持てたりしている。

ここからは、それぞれの質問項目についてあなたがどう感じているかを質問します。

設問.19 今後のオンライン授業と対面授業とのバランスや在り方についてどう思いますか。

- 1 すべてオンラインでの授業を希望する
- 2 オンラインでの授業を多くし、対面での授業を一部という混合を希望する
- 3 対面の授業を多くし、オンラインでの授業を一部という混合を希望する
- 4 すべて対面での授業を希望する

設問.20 オンラインによる英語科教育法Ⅱの授業について、受講してよかったと感じていることについて具体的に教えてください。

設問.21 オンラインによる英語科教育法Ⅱの授業について、受講して改善してほしいと感じていることについて具体的に教えてください。

設問.22 教員へのメッセージ等、自由に書いてください。





Effectiveness and Problems of Online Lessons Identified  
from a Student Questionnaire  
—Through Methods of Organizing English  
Language Education II Lessons held during  
the First Half of 2020—

TAMURA Takamitsu